

稲武の養蚕製糸の紹介と「稲武 KAIKO 学」

古来より三河地方は養蚕が盛んで、三河産の生糸は、赤引糸（あかひきのいと。清らかで美しい糸という意味）と呼ばれていました。平安時代の延喜式などの古書には、神宮や皇室の重要な祭祀には三河産の生糸を用いるのが良いという記述もあります。愛知県豊田市の稲武では、明治の殖産興業として、古橋家 6 代当主の古橋源六郎暉児が養蚕業を奨励したことで、養蚕製糸業がとて盛んになりました。

稲武からは、明治 15 年（1882）から、伊勢神宮神御衣祭（かんみそさい）のための生糸の献納を始め、今日まで毎年一年も欠かさず行っています。また、天皇陛下が代替わりされた際に行われる大嘗祭（だいじょうさい）の繪服（にぎたえ。絹織物）は、大嘗祭のたびに稲武地区から調進しています。このように、**稲武地区には、シルク分野で全国トップレベルのストーリーが受け継がれています。**



豊田市稲武献糸会

明治 14 年に創立され、稲橋村武節村組合献糸会、稲武町献糸会を経て、現在に至ります。

もともとは町役場に事務局がありましたが、豊田市に編入合併以降は財団法人古橋会が事務局を引き継ぎ、各自治区の代表者にご参加いただき、毎年の伊勢神宮献糸を継続しています。

いなぶまゆっこクラブ

稲武から養蚕農家がなくなってしまった後も、養蚕や繰糸の技能継承と、伝統文化の継承を目的に発足したのが「まゆっこクラブ」です。今なお、桑の栽培、蚕の飼育、繰糸を手作業で行っています。

特に技能継承には、後継者の確保と育成が必要で、持続可能な方法を模索しています。

お蚕さんやシルクの新しい可能性を探る「稲武 KAIKO 学」

お蚕さんは何千年も人間とともに暮らし、品種改良が繰り返されてきたため、桑の葉という植物を高い効率で高分子化合物に変換できます。これにより、天然由来の新素材や絶縁体などの工業製品、医療製品などを作り出すことができ、CO₂ 排出量の削減や、SDGs の達成に貢献できる可能性があります。この他に身近な分野だと、繭はヘルスケアや化粧品、サナギは食品などにも活用できる可能性があります（裏面もご覧ください）。

稲武 KAIKO 学では、シルクの先進事例を実践・研究されている外部講師を毎回お招きしてご講演いただき、地域住民や企業も一緒になって、様々な面から新しい可能性を探っていこうとしています。

お蚕さんやシルクから「まち守り」を考える

ただ新しいことを闇雲にやれば良いわけではありません。まずは、稲武の全国トップレベルのシルクをきっかけに、地域の魅力やアイデンティティを再確認し、その上で、新型コロナウイルスや地球温暖化対策など、めまぐるしく変化している社会の期待にも応えることで、**地域の暮らしと文化を守る**ことに繋がることを期待しています。



令和 4 年度第 1 回稲武 KAIKO 学
「シルクフードとサステナビリティ」



令和 3 年度第 1 回稲武 KAIKO 学
「カイコの新しい可能性を探る！」